

## 「日本の動物園の在り方の新たなるパラダイムを目指して

### ～地球規模での生物多様性保全と文化多様性保全の視点から」

西原智昭 (WCS コンゴ共和国支部)

日本の動物園は遊園地などの遊興施設と同一視されがちであり、運営機構上一般に「公園施設」と同じ扱いを受けている。営利施設としてある運営及びリクリエーション志向に加えて、飼育・展示する動物の多くは絶滅危惧種であり人類の共有財産である観点から、保全・教育・研究という動物園の世界標準を目指すべきではあるが、日本ではそうした認識は薄いばかりでなく、動物園は教育効果を前提とした博物館型の展示デザインや学校教育との有機的連関が十全でない。「かわいい」—動物園で動物を見て最も頻度の高い来園者の言葉は、動物に親しみを持つ入口とはなっても、多くの来園者がその先にある保全観を習得することを期待するのは難しい。日本での動物園の存在意義がパラダイム転換を果たす為にも、動物園が野生動物や自然環境に関するオンタイムの情報を入手すること、動物園スタッフが海外での野外研修を通じて実地体験に基づいた情報提供を実施すること、動物の解説内容やその展示方法や地域・学校との連携をその先駆である海外の動物園から学ぶことなどが課題であり、その上で、昨今の地球市民的立場に立った生物多様性保全に寄与する成果が期待できる。また、動物園における保全教育の内容は現在、動物一辺倒な内容にとどまりがちであるが、野生動物や自然環境の情報の基幹的拠り所となっているのは、その地域の先住民の存在であり、彼らは生物多様性保全の最重要アクターである。特に、野生生物保全には、先住民自身による理解と同時に、昨今の貨幣経済や近代教育の浸透により変貌しつつある彼らの現況が理解される必要がある。この調査研究の成果をも動物園における保全教育に組み込むことによって、動物を見に来た来園者が、動物だけでなく、動物をとりまく人間活動や人間と自然との関わりまでも考えるような契機を提供できる。このようにして、生物多様性保全の視点だけでなく文化多様性の観点をも取り入れた斬新的で実践的波及効果の高い保全教育を、動物園という一般市民に広く利用される場所において実施することが、いまのグローバルな世界の中で求められている(ご本人より:ちょっと堅苦しい内容かもしれませんが、実際のセミナーでは、西原自身の仕事も紹介しつつ、いろんな事例を挙げながら、ざっくばらんにお話できればと考えています)。

#### 講師プロフィール:

1989年から20年以上にわたり、コンゴ共和国やガボン共和国などアフリカ中央部熱帯林地帯にて、野生生物の研究調査、国立公園管理、生物多様性保全の仕事に従事。現在の所属先と役職は、WCS(Wildlife Conservation Society) [www.wcs.org](http://www.wcs.org) コンゴ共和国支部、Ndoki ランドスケープ・自然環境保全技術顧問。詳細は <http://www.arsvi.com/w/nt10.htm> を参照。